を引き起こす。

■生物多様性の危機。

① 地球温暖化による影響。

※減少・絶滅。分布域の変化。産卵・出産・開花期（繁殖期）の変化。出産数・散乱数の減少。などが考えられる。

② 化学物質などによる影響。

※農業では農薬・化学肥料多用などで起こる影響。

③ 人間活動や開発による影響。

※開発による生息・生育地の減少や環境の悪化、珍しい生き物の乱獲や盗掘など。

④ 人間により持ち込まれたものによる危機。

※人間により持ち込まれた外来生物や化学物質による影響です。

外来生物と言えばアライグマやブラックバスを連想しますが、植物でも生態系に悪影響及ぼす外来種は沢山あります。

⑤人間活動の縮小による影響。

※人間の働きかけが減ったことによる影響です。

高齢化、過疎化で耕作放棄地の拡大。里山の利用が減り人が山に行かなくなた等々。

こんなことが複合的にからみあって野生獣のエリアが拡大→獣害の拡大につながっています。

私たち一人ひとりが生物多様性を深く理解するには、自然の中で生き物と触れ合い、豊かな生物多様性を実感してみることから始めなければなりません。

私たちは。生活の基盤である生物多様性を保全し、同時に持続的に利用する社会の実現を目指すとともに、後世に伝えて行く責任を負っています。

【※＝編集者の補足文書】

「鉄道における獣害被害の現状」

JR東海三重（紀勢本線）

紀勢本線では、鹿と列車の衝撃事故が近年増大。侵入防止柵の設置・工夫、注意運転区間の設定、車両対策、忌避剤対策など行ったいるが、いっこうに減らず 平成23年度では203件にのぼっている。

侵入防止柵設置や事故処理にコストがかさむ。

衝撃事故で大幅な列車の遅延が発生することもあり、乗客にも迷惑をかけている。

《感想》「フォーラムに参加して」

モンキードッグに関わってから、市・県主催の「獣害対策」の講演を何度か聞かせて頂きました。

その共通点は『被害地域全員の対応』、『木や草などの伐採』、「田畑の周辺に柵設置」など全て最もな事柄ばかりですが、地域の藪の伐採や、柵の設置などには少なくとも「持続させる体力」が必要です。

しかし、これら被害地域の多くが独居者も多い高齢者世帯です。

この現状の理解が行政側には欠けているのではないかと、MDパトロールをしながら思うことがあります。

高齢者の方は、大事な田畑の草刈りが精一杯の状況であり、それを囲む周囲の草木の伐採、即ち共同作業で緩衝帯や強固な柵の設置など、地域住民任せにするには自ずと限界があると思います。

これら高齢者への支援体制は柵設置などの補助金だけでなく、若い力の「人的支援」が一番必要ではないかと思いながら今回のフォーラムを聞いていました。

【MDC 畠山　ひさ子】

シカ捕獲罠『サークルD』

黒田地区にテスト設置

名張地方では近年シカ被害が急激に増加し、その対策に追われています。

名張市農林資源室では、捕獲体制の強化・推進を図るを目的に最新式「鹿移動組み立式囲い罠「サークルD」を導入し、テストを行っています。

サークルDは、今までのドロップネットと違いモニターによる監視は不要で、周辺環境に応じた捕獲数をカウントセンサーに入力しておけば、予定数に満てば自動的に扉が閉まり複数頭捕獲できる。

また、ユニットの組み合わせによりどこにでも設置できるという優れものです。カウントセンサーはソーラー発電により蓄電、作動します。

黒田区に8月末、設置。

黒田区では農業委員の増田さんを中心に、罠の監視や管理に尽力されています。

（写真＝「鹿移動組み立式囲い罠サークルD」と増田さん。黒田で）

（写真＝森林被害・赤目龍神山で）

名張市農林資源室では黒田でのテスト結果が良ければ数を増やしていきたいと言っています。

矢川のアライグマ その後

9月上旬。田中さんがまた、1頭捕獲！。

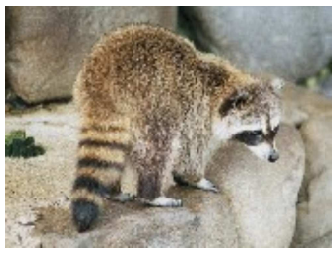
アライグマは特定外来生物に指定されています。

「アライグマの捕獲は、地域ぐるみで行いましょう」。個人的に行っても大きな効果は期待できません。地域ぐるみで行うことで個体数と被害を減らすことができます。

形　態

体毛は灰褐色や茶褐色などがあり、目のまわりは黒いアイマスクかけたようで鼻筋が黒く、タヌキと誤認されることが多いが、タヌキとの違いとして長いふさふさとした尾には黒い輪模様があるのが大きな特徴です。

また、足が黒いタヌキやアナグマと比べて、アライグマの足は白っぽく、耳には白い縁取りがあり、さらに、クマなどと同じく、かかとをつける蹠行性（ベタベタ歩き）という歩き方をするため、足跡は人の子供の手のような長い5本の指がくっきりとつく。この特徴は、アライグマと他の哺乳類とを識別する重要なポイントとなります。



指が長く、器用で、前足で物をつかむことができる。成獣では頭胴長42～60cm、尾長 20～41cm、体重 4～10kg

原産地はカナダ南部からパナマ。日本にはペットとして輸入されたが、気性が荒くペットには不向きなため野外に放されたり、逃げ出す個体も多いなど、現在、全国すべての都道府県で野生化が確認されています。

生息環境

水辺を好むが、幅広い環境に適応し生息。夜行性で、昼間は樹洞や家屋の屋根裏、廃屋などの中で休息しています。家屋をねぐらとして利用することによる天井や壁のなどの汚損の、生活環境被害が報告されており、社寺の屋根裏への侵入で、歴史的建造物が被害を受ける例も多々あります。

社寺のかけがいのない文化財を守るために、早期の対処が必要です。

※柱や壁に爪痕があれば要注意。また、納屋や家屋などに入られないよう侵入穴を塞ぐ。

雑食性のうえに繁殖力が強いため、在来生態系に影響を与えている可能性も指摘されています。

食性

雑食性。野外に定着した個体は、果実・野菜・穀類、カエルやネズミなど小動物、鳥類、魚類、昆虫など幅広く食べる。

繁殖

雌は1歳、雄は2歳で成熟し、2歳以上の妊娠率はほぼ100％といわれている。繁殖期は1～3月で、妊娠期間は63～65日、春に3～6頭の子供を生む。1度目の繁殖に失敗しても2度目の発情期があり、その場合は夏に出産する。一夫多妻制で、雌が子育てをします。

感染症

アライグマはアライグマ回虫、狂犬病、レプトスピラ症など人畜共通感染症を媒介します。

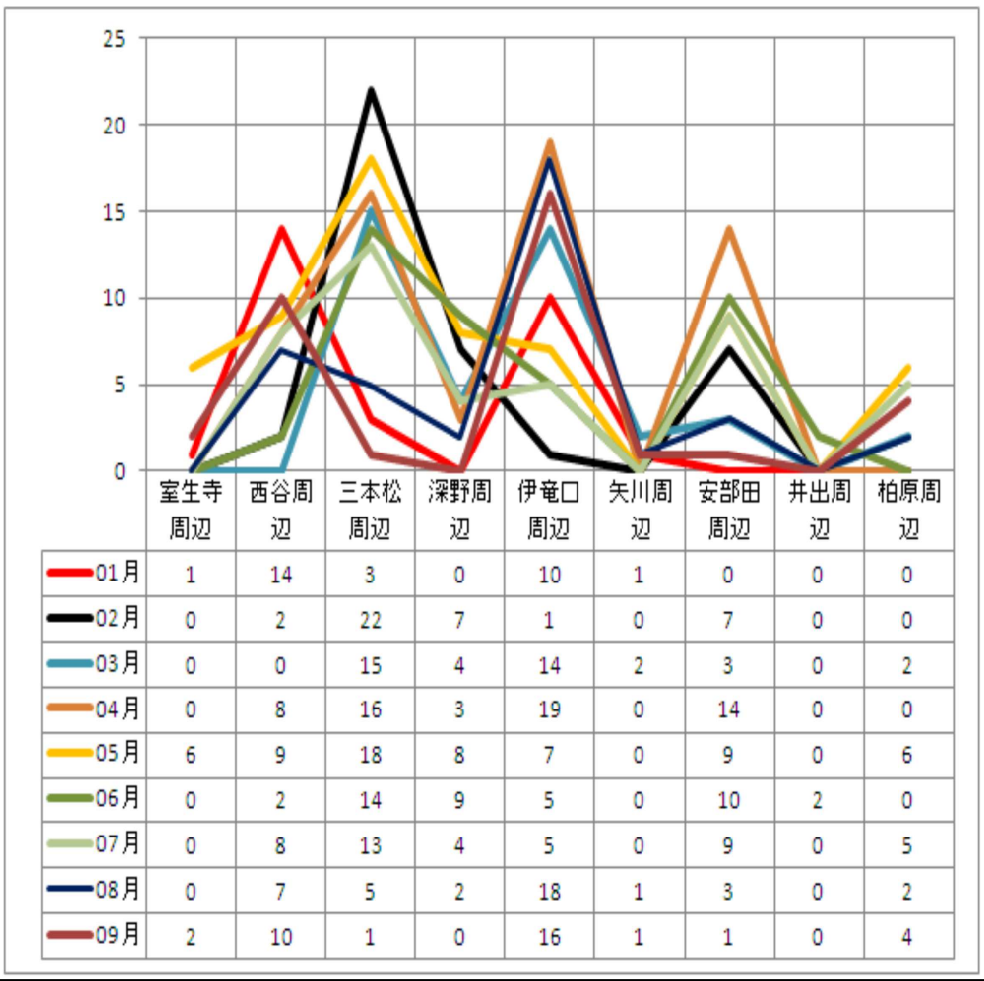
「アライグマ回虫」は、人体に感染すれば死亡リスクがありアメリカでは人間（幼児）の死亡例があります。

「狂犬病」は北米ではアライグマが最も高い割合を占めているそうです。

「レプトスピラ症」は、人ではワイル病、秋疫（あきやみ）として昔から知られています。病原性レプトスピラ感染により起こる人獣共通の感染症です。

感染症の予防のためには、アライグマを扱う際は手袋を着用して肌をできる限り露出せず、病原体が含まれている可能性のある排泄物や血、もしくはそれらで汚染された土などを素手で触らないようにし、使用した衣類や道具は消毒することが重要です。

名張市農林資源室では、被害防止対策を推進するため、捕獲が進みにくいニホンザル、ニホンジカ（メス）、ヌートリア、アライグマに対し報償金を出して捕獲を呼びかけています。



	室生寺周辺	西谷周辺	三本松周辺	深野周辺	伊竜口周辺	矢川周辺	安部田周辺	井出周辺	柏原周辺
01月	1	14	3	0	10	1	0	0	0
02月	0	2	22	7	1	0	7	0	0
03月	0	0	15	4	14	2	3	0	2
04月	0	8	16	3	19	0	14	0	0
05月	6	9	18	8	7	0	9	0	6
06月	0	2	14	9	5	0	10	2	0
07月	0	8	13	4	5	0	9	0	5
08月	0	7	5	2	18	1	3	0	2
09月	2	10	1	0	16	1	1	0	4

サルの出没状況

サルは、夏期には標高の高い涼しい場所で暮らし、冬には寒気と食糧不足に耐えるため少しでも暖かく餌の多い低地に移動し冬を過ごし、春には芽生えを追って移動する季節移動が基本です。

しかし、現在では一年を通して、人に被害を与えることなく山中で暮らすサル群はいなくなり、人のエリアを遊動し、農作物を餌とする群ばかりになっています。

サルの移動には、植生環境が大きく影響します。

「名張Ａ群では、ニセアカシアの咲く頃、桑の実の熟れる頃にはその群生地に執着し、しばらくはそこを移動しない」。

今後、移動地図に植生地図を重ねて表示すれば移動要因などがはっきり解明でき的確な対策につながるような気がします。

本紙も、被害対策に少しでも参考になればとの思いで、Ｂ群移動状況を連載しています。

山の植生環境、防除体制の強弱、農作物の状況などを、おぼろげながら把握することできます。